

昭和四十九年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和四十九年七月二十三日 發行(毎月一回・十五日發)

(通第二九六号)

慈光

第二十六卷 第一号

次

現代青年の陥り易き思想上の深穿……………近角常観……………(1)

人生随想より……………柳瀬留治……………(6)

あゆみの跡……………臼杵祖山……………(9)

俗難と啓蒙……………山本普道……………(10)

念仏詩抄……………木村無相……………(16)

聖人の常持語……………花田正夫……………(19)

目

現代青年の陥り易き 思想上の深 葬

近 角 常 観

現代（大正十年）青年の得て陥り易い生活上、社交上、要するに思想の上深葬（しんせい）がある。それは一見すこぶる美しく、真（まこと）らしく、しかも善きものように思われる思想である。たとえ人愛するとか、親切にするとか、人のためにするとか、人と和ぐとか、他のために働くとか、社会に奉仕するとかいう思想である。云うまでもなく、争うとか、戦うとか、他を制するとか、自我を主張するとかいう、荒々しい思想でなく、温かな思想があらわれたのはまことに喜ぶべきことである。ここに宗教的気分、信仰的気分と接近して来たと言ふことが出来るからである。

併し、真の徹底した信仰の立場から見れば、所謂、紫の朱をうばうならいで、類似しているだけ一層よく注意せねばならぬ。初めから一見して誤りと見えるものは、人が見違えることはないが、類似したものは誤りに陥り易いのである。しかしその誤りも多少の相違ならよいが、ややもす

ということとすこぶる混乱されやすい危険がある。近頃社会の表裏に続出する家庭的出来事の如きは、おそらく第一歩の踏み出しが、この誤りより出たものが多いようである。しかも自身がそれに気づかぬばかりでなく、世上の評者も区々にして所見を異にするのは、この思想上の陥葬に踏みはずしたものと云わねばならぬ。

併しながら、最終に至ると、實際上動きがとれぬようになって、初めて自己の不完全なことを自覚し、先に真なり、善なり、美なりと思つたのは、畢竟理想的に考えたままでのこと、却つてこのために自己の虚偽、罪悪、卑醜なことを自覚するであらう。中には最終まで自覚せぬ人もある。しかし少くとも実際問題として結局頭を下げねばならぬようになるものである。この場合一刻も早くこのような虚偽、罪悪、卑醜の我等を悲憫、（ひみん）矜哀（こうあい）したまう如来の大慈悲、大真実、大善、大功德に帰入して、この陥葬よりまぬかれ出るべきである。

しかしこれに注意すべき思想上の難関がある。それはこの陥葬をまぬかれ出るについて一つのみづきがある。即ち一旦自分の真なり、善なり、美なりと考へたことが、絶対のものではないと悟つたとき、ただちに是等のすべてが無

れば、その結果全く正反対の方向に迷いこんで、深葬に落ち入り、断崖に踏みはずすことがないとは云えぬ。

とかく現代青年の陥りやすい思想上の深葬は、一言にして云えば、理想的ともいふべきものである。その意味は、自分自身では中心からすこぶる美しく、真なるものと思つているのである、しかしその結果は全く反対に陥ることになるのである。

たとえば、人を愛するとか、親切にするとか言へば、自身では善なり、真なりと思うのも無理ではない。しかし、いつも吾人が言うように、自分を標準とし、起点とし、中心としての善であり、真である、即ち相対的なものである。しかし自分では絶対的のものであると考へているのである。それだから真に人に親切にする積りで人を煩わしたり、人を愛する積りで人を損うたりすることが多い。とくに愛という思想の如きは、宗教的慈愛、人道的博愛

価値であるばかりでなく、むしろ罪悪、虚偽、卑醜なりとまでは落ちられないものである。なんとなれば、絶対にな（な）し遂げることは出来なくても、今まで成しただけは善なり、美なり、真なりと考へて、これを打捨てる事が出来ぬものである。

上にあげた慈愛と愛情とのほきちがえのようなことは分りやすいけれど、近頃世人に迎えられる、人のために働くとか、他のために奉仕するという思想などは容易に自覚し難いものである。

しかし我等の思想は絶対を要求する、書画の鑑定には眞贋の二者より外はない。信仰の点数は百点か零点である。真に人のために働き、奉仕するというならば、絶対に身を捨て自己を犠牲にし、すこしも名利の念を持たず、自己の貢献が闇から闇に葬られても、すこしも遺憾の念をおこさないならよいが、私自身の経験によると、ここにいたつては全く兜を脱がなければならぬ。

この際、今まで人の為など考へたことの大それた、空恐しいことに身の毛のよだつを覚えた。聖人が「小慈小悲もなき身にて有情利益はおもうまじ」と仰言つたのは全くこれがためである。それだからこそ凡愚底下、浊悪最下と極言せられる次第である。

○ それなのに現代思想の欠点は、出来るだけすればそれだけ善である、一旦握ったものがすたらぬのである。聖人は思うがごとくたすけ遂げることが出来ねば、始終なき聖道の慈悲であるという嫌らしい捨てられるのである。

○ 歎異抄に「およそ悪業煩惱を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にはほころ思ひもなくよかるべきに、煩惱を断じなばすなわち仏なり、仏のためには五劫思惟の願、そのせんなくやまします」とある。

如何にも煩惱を断じつくすこと能わずんば、畢竟、悪業煩惱の名をまぬかれることは出ぬ。すでに悪業煩惱の名を得たならば、いかでか自力修善の仮面を保ち得べき。そのかわり絶対の慈悲の前には、すこしも悪業煩惱を憂うべからず、これをおそれるのは、却って五劫思惟を徒勞にすることになる。この絶対の慈悲あればこそ、絶対に悪業煩惱の徒と頭を下げることも出来るのである。

○ 聖人が「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐せられたのも、一点の善をもみとめられぬ、我身は現にこれ罪悪生死の凡夫の自覚がある。

退を分かつたではないか。真に聖人の門侶たらんものは、聖人の一点の妥協を許されぬこの真面目を仰がねばならない。

○ 現代の聖人を渴仰するものは、聖人が人のために忍受せられた御行跡を理想として、これをたどって行わんとする傾向がある。これはつづまるところ聖人をはきちがえて、自力修善の陥穽（かんせい）におちいったものである。古来、妙好人を理想として、同様のあやまりに墮するものがある。

○ 聖人を如来の権化（ごんけ）として、我等がその絶対の慈悲に浴するならば、まことに結構なことであるが、聖人を理想として忍受を實行せんとするものは、現代式に行不退をくりかえすものである。三百八十余人が法然上人を理想として、自力念仏におちいったあやまりにおちいるものといわねばならぬ。

○ このような理想的追求は、絶対に為し遂げることには不可能なことは明らかな道理である。

この種の理想家はこの点においては反対に大胆にも、或程度において打ち切ることはすこぶる平気である。その口実として罪悪煩惱を持ち出すのである。

○ 聖人の真面目である。

（編者註）近角先生がよく譬えられたのは「槽に一杯の清水が満ちていけば、飲むにも洗うにも自由であるが、その中に一滴でもバチルスが混入されると、もう全体がつかえなくなる」と云われた由であります。見た目では一滴のバチルスの混入では濁りは見えないので捨てようと思わないことを懇切に注意して下さったものであります。

親鸞聖人渴仰の氣運

○ 近時、聖人渴仰の氣運が社会に勃興するに至ったのは大いによろこぶべきことである。然れども、聖人の真面目を得たるものが少いのは残念である。

○ 勿論見方によっては、ともかくも諸方面より聖人を渴仰することであるから、むしろ大同をとりて小異を問わず、一世の氣運を傾倒すべしということも出来る、如何にも一種の運動として見れば、むしろかくすることが策を得たものかも知れない。

○ しかし聖人は、法然上人門下に三百八十余人の念仏者を打って一団として、浄土門の氣運を張ろうとは仰せられなう。むしろ法然上人の真面目を得たるもの、僅に五・六輩にだも足らざることを警告されるために、信不退、行不

○ しかもある程度の理想の實行は、堅く握って打ち捨てないのである。しかも、その程度は各自、随意勝手に、出来るだけということになり、出来ぬ点は凡夫であるからいたしかたがないという。はなはだしきにいたっては、免じてもらう、恕していただくという。こうなると、自力作善の理想主義は、極端な放縱主義、自然主義と妥協するようになるのである。これは現代他人のために働くことを理想とする人が、自己の生活や行動について、無責任におちいり易いゆえんである。

○ ここにおいて、或者は聖人の名のもとに極端な放縱、自然の生活を是認して、聖人の真面目を得たかのような思想上の陥穽に墮するようになる。

○ これ、我等の悪業煩惱の氷のままに存在を許して、いまだその氷を融かしめる無碍光の絶対の慈悲に浴してないあやまりである。勿論、言葉の上では、慈悲をくりかえしているのである。しかしながら唯罪悪の存在を是認するばかりであって、罪悪を融かしめる無碍の大悲にあたためられぬのである。

○ 罪悪のままといわれることは、罪悪自身の氷塊からは、一点の微温さえ出て来ぬことを意味するのは勿論であるが、それ程の氷塊もまたくることあたわざる仏日の照耀のた

めに、氷塊の中心まで慈光が徹到して、罪惡の最後まで消滅されることを忘れてはならぬ。蓮如上人の御文に

「されば無始よりこのかたつくりとつくる悪業煩惱を、願力不思議をもって消滅するいわれあるがゆえに、正定聚不退のくらしいに住すとなり。これによりて、煩惱を断ぜずして涅槃を得といえるはこのころなり」と、あるが、実にこの積極的な信仰の表現である。上記の歎異抄と対照して、不断煩惱得涅槃の両面をあげわうべきである。

○ 聖人の名の世に渴仰せられるだけ、吾人はますます聖人の真面目の渴仰に、力をたさねばならぬ。

大正十年十二月、求道誌より



人生随想

暗きゆえに光あり

新年になると、誰しもおめでとうと年ほぎをいう。別にそうめでたいこともないのだが、いわれて見るとおめでたい気もする。古来ことほぐとって祝言にあやかかって祝い、すると本物のめでたさが来る。

我々は靈(ことたま)の奇しさを信じているものではないが暗い生活をいくらついても暗い、心を転じるほかはない。いかなる人も現実の生活に暗いかげを持たぬ人はない。或人は暗さに徹しろ、突き抜けろというが、徹し、突き抜けろということは容易なことではない。それにはコンミニズムの行方と、仏教の行方とがある。

コンミニズムでは弁証法的(べんししようほうてき)な理論で頭の処理をするのであるが、頭だけ処理されても我とわが身が処理されず足は地に残っている。仏教は暗さを突く、だが暗さそのものを措いて明るさはいわぬ。人生の無常、自我の罪業を突くこれを人生の否定、現実の否定だ

惠空講師語録

○ 至誠心と書きて、誠を至すとも読むべからず。深心と書きて、心を深くする義とも思うべからず。凡夫の二業(心・口)の分域にあらず。意業を調うる分齊にもあらず。

○ しからば何をか真実とも、深心とも、金剛心ともいうぞと云えば、祖師の御釈をうかがうに、欲生の体は信楽、信楽の体は至心、至心の体は仏の尊号なりと云々。

○ 今世の風、たまたま礼拝誦経等するを以て当流の法義と云いて若し礼拝誦経等におろそかなるを見ては法義なし、後世者にあらじなど思う人あるが、経釈の意はしからず。奉公、あきない、女人、若輩、辺土の人等は本尊を持たぬもあり。朝夕の礼拝供養もなく、香花のつとめも欠けたる類のみなり。この類を以てかえりて浄土の実機と知りぬべし。必ず助業を以て法義ぞとのむことなかれ。

○ 明のために火を以てすれば暖おのずから来たる。稲のために苗を植うれば自ら藁を得たり。

柳瀬留治

とかつて軍閥が非難し敗戦思想だといった。ために当時本山が看板を塗り替えて時局に便乗した。おろかにも宗教の真実を失い時局におもねつて墮落した。無常無我の大本定があって、大死一番もつて絶後に蘇り、前念命終、後念即生と起ち上り得るのである。

故近角先生は人生の暗から己れの濁悪から御自身が救われ撰取された体験よりして救われるとは、撰取されるとは、猫が首つ玉をつまんで拾げられた有様だと説かれた。地から引き離され藻掻く手足もただ垂れるのみである。馬が船に積まれるためにクレインで宙につるし上げられているのを見る、それである。猫の首をつまんで引きあげられている、それである。我々は藻掻いても果しのない、暗い地上から引き離され、初めて、おのれの重さを知り、引上げる力の偉大さに歓喜感泣させられるのである。

これは「めでたい」という言葉にあやかかって暗い地上で暗い心のままおのれを誤魔化しているのとは違ふ。又暗さを突抜けろといつて、おのれの暗い自身の炭団をいくらつ

ついても、それは黒い粉が果てなく出るのみで、そのため己の手足を汚し触れる人を汚すのみの他何物でもなく何等光に触れ救いに遇うことは出来ない。唯々このおのれの炭団は火の点くことのみによって光が現われ熱が出て、暗く寒く貧しいおのれを温め足らわせず、更に世を温める。この暗く寒い私は、この暗く寒さを憐愍し給う仏陀撰取の火がついて消えないことによって、黒い全体がごとごとく火ならざるはなく、暗黒即光明、煩悶懊惱即満足歡喜となるので、暗さと明るさは二元的解決ではない。暗さに対しそれを撰取して捨てざる光のみの唯一元なのである。私はこれのみによって暗い生活にありながらこの光に足り、よしなき歌をもよみ、冗談もいうことが出来るのである。暗しとて、寒しとて徒らに炭団をつつくこと勿れ、ただつきはなれざる火を仰ぐべきである。

人生は孤独である

我々人間文化は群居本能が本で社会をつくり文化をつくるのであるが、動物にも群居本能がある。主に草食動物で羊や馬や牛、野山では猿や縞馬などで、敵が襲うと集団をもって防禦する利益からのようである。

人間社会になると複雑である。労資の対立から巨大な資本に対し集団で当る。それは国内政治にも国際間にもある

又真実の情をもつて憐れみ悲しむとも、人間である、慈悲心にも限度がある。子供の不具や精薄を憐み悲しんでも人間の力では如何ともなし得ず、共に抱き合つて泣くのみである。特に死にのぞんだ親や子に対しては、人の力が絶し、何ともならない。まことに「ひとり生れ、ひとり死にひとり来たつて、ひとり去る」のみである。

誠に人間は孤独である。真に孤独であることが知られて真の芸術、真の宗教が起つて来て意義を生じて来るのである。彼の芭蕉も人生の孤独に徹してかの芸術をなした。法然上人も親鸞聖人もそれなるがために救われ、ひかりを見出したのである。

人間の真実、情愛というまことにはかない風前の灯火の如く当てにならぬもの、まして頼みにしている己の生命でもある。

私も人もこうした世にたまたま利害を超えた絶対の真情にふれて、かたじけなくありがたく、その思い掛けなきに顔を垂れ感泣される。孤独な人間、当てにならぬ人間生活中に、宗教は誠に人生の闇黒を照らすともし灯というべきものである。

人間は実に勝手なものでこちらの御都合次第で集団で当り又うまい口を見つけるとこっそり一人で独占しようとする。そしてそれを侵そうとする者に対して戦を挑む。肉食動物の対手を倒して食らうのと択ぶところは無い。

「それは物質生活だけだ愛情は違う」と言われるかも知れぬが、愛情も「水心あれば魚心」式と遠くはないもの、心を洗い晒し語りあう仲の離友は愛が強いだけ憎みが強くなる。夫が妻を殺したり、子が親を殺したりもする。愛情欲求の相友した時にそれが起る。物質的利害と大した違いがない。物質が感情かの違い目に過ぎない。

法学や社会学で社会を分けて利益社会と共同社会に分けている。国家や職業組合、労働組合は利益社会だとし、家庭だの文化集団や宗教信徒などは共同社会だとし、愛の精神で結ばれるものとしているが、その最も愛情によって結ばれている筈の家庭でさえ最近共同社会であるか疑わしくなつて来たという。欲求がくい違つて骨肉相反目し殺し合うからである。欧米も日本も、家族は夫婦単位となり信じ合えるのは夫婦間だとしているが、それさえ噛み合い殺し合うにいたつている。

悲しい哉、人間の愛情は相対的なもので、愛と憎は一枚の紙の表と裏に過ぎず、欲求が満たされると愛し、反すると憎む。

図書紹介

わが医学と求道

川畑 愛義 著

定価 五〇〇円。

発行所、京都市下京区堀川通り

花屋町、百華苑。振替、京都二五七八八番

(自序抄)

私は医学の研究に生涯の大半を過ごして来ました。……こうした私が宗教の世界へ導かれたのは、きびしい社会の現実、冷たい科学の矛盾、そして何よりも自身の能力の限界……それらを打解しようとするほど、いかながら果てしない「絶望」のふちに沈むよりほかはなかつたのです。……こうした私が、実を云えば、宗教的な眼が少しづつ開かれるようになってから私はようやく人の生命の限りない尊厳性を肌で感ずるようになったし、また医学的に実証されたという真理についてもその本質を冷静にうけとめるようになったような気がいたします。

……わが日々の生活の歩みは心もとなく、よろめきがちであっても、私が慈光のかがやく人生の白道のさなかにいることだけは体感させて頂いています。云々

一九七三年八月

著者しるす。

年を送り歳を迎えても、また風につけ雨につけても尊とまれ候は、ただただ仏恩のみに御座候。

世の中のことは、苦は苦にからめられてますます苦に沈み、楽は楽にしばらくはよいよ楽に耽（ふけ）り、苦楽ともに我が身心を繫縛いたし候。万事はみなみなこのならに候。

然るにただひとり如来の御慈悲のみ、世の盛衰榮枯、人の苦楽昇沈、何につけても尊とく道味いたされ候。

苦を捨てて後に出で来る楽に候えば、その苦を捨つることの不可能なる我等は、いかで楽ということの真実に味われ申すべき、とてもとても覚束なき儀に御座候。苦をそのままに捨てずして、一切を撰取したまえる御慈悲のほど尊重に候。

正も偏すれば僻となり、邪も通ずれば中となる、吾我の執なきを要とす。

吾我の執封を離れたる正は、古今を論ぜず通ぜざることなく、東西を問わず達せざることなし。古えに居して今に通じ、今に在りて古えに達す。東にありて西に通じ、西に居して東に達す。正中の道は古今を超え東西を絶す。

俗 難 と 啓 蒙

山 本 晋 道

はありませんか。

答への一

現代人の多くが宗教を信じていないのは、宗教に価値が無いからでなくて、現代文化の大きい欠陥がそこに現われているのです。明治以後の日本の教育から、宗教を分離したのが間違いだったのです。そのために、明治以後に育った人々が宗教価値を見失ってしまったのです。宗教と教育とは、分離すべきではなくて分化せしむべきものであったのです。宗教を分離し、無視し、或いは蔑視した教育の結果が今日の醜悪な世道人心を生み出して来た大きな一つの原因です。これを気付いて近頃宗教的情操教育の必要が叫ばれて来たことはおそまきながら有難いことです。

宗教なくして暮らしている人が果たしてそれで本當に落ちついた深い生き方をしていられるでしょうか。宗教を知らぬから無いままで生きているのであって、正しい宗教にめぐりあいさえすれば、宿縁ある人はぎっと信仰に入るはずで

(昭和十七年十一月)

先日ある集まりで次のような仏教への非難を聞きまして。これは一般によく聞くことで、何かと参考になるかと思いませんので、問いと答えの要点を書きとどめてみました。これからも仏教一般や真宗に対する蒙をひらいて行きたいと思いません。

質問の一 宗教は無用ならずや

現代日本で一流の人物に、宗教を信じている人が何人あるでしょうか、宗教なくして、それらの人々は立派に国につくし、幸せに暮らしています。これを見ると人生に必ずしも宗教は必要でないと思えますが、如何ですか。事実現代日本人の多く宗教を必要と思っていないのはありませんか。

質問の二 仏教は人間を去勢せずや

宗教、ことに仏教は人間を諦め主義にして、厭世的消極的ならしめませんか。それは個人的にも国家的にも有害で

古今東西は、時代の変遷あり、思想の変化あり、知識の明昧あり、理想の高下あり、人種の相違あり。これ等の一切を貫通して、しかも融会するものは中正普遍の一道なり

×××

×××

：午后四時すぎ自動車の待合室に用事ありて出かく、途中に一匹の犬に遇った。口の出まかせにエスと呼びかけたれば、彼はいかにも親しげに自分達の行く後を追ひ、如何にも飼犬が主人にでもつきまとうように飛びついたり、着物の裾を喰えたりなどする有様であった。店に入り饅頭を買い与えられたれば、いよいよ後を慕うて離れずに往復の路を一緒に同行してくれた。

エスとは偶然の呼びかけの声であったが、それが丁度彼の本名であったろう。あれほどまでに往復の路すがら陸まじげに後を追うて離れないところから見れば、名を呼ぶの尊さが道味された。ここに私は、名を呼ぶことは単なる名にとどまるものでなくして、名以外に体の有り得ないことを感じ、善導大師の「応声即現」声に応じて現われ給う弥陀仏の尊さを信嘗し、エスによって教えられるにつけ、彼はたしかに仏の一法身であった。

す。宗教の何たるかを正しく教えられなかつた明治以後の日本人はこの意味で不幸であると思います。今、無宗教である人々も、○ 正法にあらざらざらざらこれを信受して、今までも増して一層幸福にくらす人になるでしょう。生死の根本問題の解決が宗教ですから、この解決の上に立つことが出来たら、いよいよ力強い生活が展開されるのです。宗教に宗教の役目があり、道徳には道徳の役目があります。各自が相犯すことなく、その持場において、その独自の使命を発揮しつつ全人生の完成に相資相依しなくてはなりません。これが分化された相であり、分化されたまま有機的に統合されて、人生を完成して行く相であります。この関係を見失って、両者を分離せしめたら、そこに必ず混雑と摩擦と矛盾を生じて生の完成を妨げます。知識的教育と道徳的訓練と宗教的信仰とが、各自にその人生における分化的機能を十全に發揮してこそはじめて、円かな人間生活が実現してくるでしょう。現代人は、今こそこの道理にめざめて、正しき宗教の価値と使命を再認識せねばなりません。

答えの二

仏教は仰言るように諦（あきらめ）の宗教であります。けれどもこの「あきらめ」の世界観を低級、卑俗に解釈してはなりません。これは単に「思い切る」とか「考えぬこ

とにする」とか言うような無理なごまかしではありませぬ。仏智見に照らされて、因果の道理をあきらかにうなづかされるから、何時までも凡夫の愚痴に沈まぬのです。いつまでもただ執着ばかりにとらわれていないのです。なるほどそうかと深く心の内に背いて、苦惱を荷負して起ちあがるのです。即ちあきらめとは宗教的開眼です。この眼があいたら、迷いの因果がわかり、従って悟りの因果がうなづけます。

自分の愚と悪とを見届ける信心の眼は、柄にもないうぬぼれや浅薄な空気をたたきこわしますから、一面人間を消極的にするように見えますけれど、反面において、この愚と悪を見る眼こそ如来の御恩を見出す眼ですから、そこから知恩報徳の力強い営みが展開されて来るのであります。うぬぼれや、夢や、空元気や、欲にだまされて積極的に動いているのは本当に力強い生き方ではありません。そんなものは嚴肅な現実に当面するとあとかたもなく消滅します。

しかるに、あきらかに人生と自己の現実を見とどけ、仏恩の深遠なることを信知せる人の生き方は、地味ですが堅実です。静かに御恩を感謝し、自己の不行き届きをわびながら、合掌して無碍道を歩きます。こうした世界をあきらかに発見したのがあきらめ（明らめ）たのであります。

これ以上は、自ら信じて、あきらめるといふ味を知るより外には分りようはありません。宗教は信じて見て分る世界で、外から批評しては何とでも議論が出来ます。これは要するに、仏教徒が消極的になるのは地獄の釜を作るようなことにいらぬ元氣を出さなくなるのであって、そこにいたずらに費していた物と心と力を、真実の生命をつちこうて、自他共にお浄土に生き抜くために打ちこむのです。この方面に火の中ぐつても一歩もたじろがず、実に大胆に積極的に精進努力するのです。消極的に見えるのは力の入れどころが変わってくるからです。決して去勢されたような人生になるではありません。本當の命と光とをつかんで、実に力強く働き出すのが、人生をあきらかに見た仏教徒の生活態度であります。

質問の三

人間に悪いことをやめさせて、善いことをさせるために

お釈迦さまが、地獄・極楽を説かれたのではありませんか

答えの三

人間に道徳を実行させる手段に、ありもせぬ地獄・極楽を説いて、幼稚な人間をおどしたりすかしたりされたのが仏教だと言われるのでしょうか。そして、あなたの言われる方便とは、嘘も方便という意味でしょうか。そして昔は、そんな仏教も必要であつたかも知れぬが、今日人間の理性が

発達し、学問が進歩した時代では誰もそんなことを信ずる者もないし、又、そんなこけおどしのような方便を用いなくても、人間の道徳意識を向上せしめて、止悪作善の目的を達することが出来るではないかとのお考えでしょう。所謂、仏法無用論、仏教は信じ難しとの説でしょう。

一応はお心持は分りますが、仏教はそんな止悪作善の道徳を目的とするものではありません。道徳は人間が自己を向上せしめて立派な生活を完成することです。しかし道徳の目的はあくまで「人」になることです。しかるに仏教は「人」が「仏」になる道です。道徳はあくまで「世間道」です。人間世界の内のことです。仏法は「出世間道」です。「人間」が「仏陀」になる道です。

無論、道徳も宗教も悪をきらひ善を欲することに変わりはありませんが、その目的の高さを異にするから、その善悪の処理の仕方を異にします。道徳は悪を廃して善を修することによって統一に達しようとする相対的工作です。これは或程度可能ですが絶対的には不可能です。即ち人間は道徳的には、或程度善を実現しつつ、常に或程度の悪を抱えています。しかるに宗教では、取りのけられるだけの悪は道徳でとりのけつつ、しかもどうしても清算出来ない悪はこれを転じて善と成します。転とは転変転化であり、これを転悪成善と言います。従って単なる道徳ではどうにもな

らぬ人生の根本悪も、仏教の力によって始末に困りませぬ。転ずれば禍福、淨穢を転ずる仏教の無碍道があります。かくして転迷開悟、出離生死、往生成仏、出世間の大目的を成就せんとするのが仏教であります。

しかるに道徳はあくまで迷界の内における工作であり、生死の流れの上の工作であり、世間に立つ上のごとです。単なる道徳と仏道とはかくの如くその目的を異にし、従って人生処理の手法を異にします。しかしてこの転変、転化の大きい力は人間の手の中にはないのであって、仏力が私の内に加えられるこの聖化の妙用を發揮して下さるから、万人はこの仏力をいただいて生死の一大事を解決せねばならぬと説くのが浄土門であります。

そこで道徳は人間の力による廢惡修善の道であります。が、仏教は転惡成善のめぐみを蒙ることによって、生を越え死を貫ぬいて成仏する道であります。人は人となる道徳が大切であるとともに、人は遂にどこまで行っても人間であって、最後には泣いて別れて亡びてしましますから、いのちのあるうちに早く人が仏にまで高められる聖なる力を頂いて生死を出ねばならぬと教えるのが仏教であります。

だから、道徳があれば宗教はいらぬと考えるのは、宗教と道徳の目的の区別が分らぬところから来た間違っ考え方です。

す。未来の地獄極樂の有無は現在の因を信知して、因果の鉄則によって未来の果を判断し類推するより外はありません。だから仏説の地獄極樂は信心の眼の開いたものから言えば決して仮の方便ではありません。まさにその通りの真実であり、厳たる宗教的必然の世界であります。

母をおも う

感謝と慚愧

皆様が生前お心にかけて頂いておりました老母が、三月の病臥の後、去る十二月三十一日、安らかに諫早是真寮で往生の素懷を遂げました。行年八十歳でありました。そして正月元旦火葬、四日發喪、六日午後一時是真寮で葬送、九日郷里福岡県遠賀郡水巻町立屋敷の先祖累代の墓に納骨を終わりました。

病苦劇しい中にも、機嫌のよい時には口にするのは御法のごとのみでありました。そして、母の最後の言葉は

「かえろう……はやくお浄土にかえろう……」

親様が待ってござる……お浄土で楽になる……」

というのであります。父は三十七年前死別して、それからの母の生涯は容易ならぬ苦難の旅でありました。幼い私一人を抱きしめて、そ

但し、一口に宗教と言っても、道徳と宗教とが分化せず、に、権化の状態にある時には、一寸区別がつかぬような教えとなり、内容も甚だ不明瞭であります。純正な大乘仏教でははつきりと知識と信仰、道徳と宗教が分化されて、各々あい犯すことなく、それぞれの独特の使命を持ち、その機能を發揮して、人生を円成するのであります。従って単に止惡作善の道徳的目的をとげるために地獄極樂が説かれたものではない、仏教の目的はもつと高い所にあることをお分り頂きたいのであります。

次に地獄極樂の有無については、地獄の因があれば、地獄の果が生じることを「死ねば地獄に行く」と表現しているのですから、地獄の有無は、仏教的の智眼が開いて、自分の日々夜々蒔きつつある業因を見るとすぐ分ります。極樂があるというのと同様です。極樂往生の因を持ち、往生の縁があれば、極樂に生れ成仏するのであって、自分が因がなければ、自分には極樂は無いのであります。仏教ではすべて有る（存在する）とは現在の因によって、未来にそうなるということです。

だから地獄・極樂の有無は、その因をわが内に見得る如き信心の智慧に入ってはじめて解決される問題です。信心もなくして、有ると云っても無いといつても無駄な議論で、れ一つで張り切って戦い抜いてくれました。私一人のあるために生き甲斐を感じて、どんな苦勞にもいちけずに、私をばげましつゝ勉強させてくれた母でした。

母は郷里の近くのお念仏喜ぶ家に生まれました。嫁して来た父の家は浄土宗で後に一家をあげて日蓮宗に帰依しましたが、母の魂にしみついたお念仏は、どこまでも母を導き護って下さいました。幼い時から、この母の懷で聴かせて頂いたお念仏もお文さまも、とうとう私を今日のこの世界にまで導き育てて下さったのであります。

母は私にとっては肉体の母であると共に、お念仏の母でありました。母は教養のない農家の娘で、一生貧しさの中に苦勞して生きた女でしたが、お念仏申し仏さまを拜んで生きて行くことを私に教えてくれた母でした。私は、どんな教養の高い貴族や富豪の娘を持ったことよりも、この無知な、素朴な、しかし敬虔に一生涯聞法をつづけた母の腹から生れたことをうれしく、又ほこりに感じます。

その母に、心ゆくまで孝行したいとはずんで迎えた私共の家族でしたが、とうとう一生涯母を満足させることはできませんでした。ことに晩年の十ヶ余年余り、身辺の多忙を口実に、誠に不行き屈きのことばかりでありました。その不幸な私を母はだまって寂しく見守りつつ不足も言わずに念じつづけてくれたのでした。今にしてその深い母の心を

おもえば、無限の感謝と共に身のおきどころのない慚愧を感じます。

母を亡くして、今はじめて母の深い心にふれ得たとき感じがして、今更のごとく今までの自分の仕方がくやまれてなりません。お念仏申す外にすべがありません。

生前皆様方に一方ならぬ御親切を頂きました母に代って厚く御礼申し上げますと共に、葬送前後の数々の御厚志を深謝いたします。

合掌

(昭和十八年二月)

△畢竟依より▽



吉野秀雄歌集より

ひと日ひと日大切に生きむと気づきしは足萎(な)へし
三年前よりのこと

冬の光濃ければ寝つつ手にすくふなほしはわが命さきはへ

門庭(かどには)も覗くすべなみいくたびか妻が紅葉を拾い来て見す

行人(ぎょうにん)は病患を得てたのしむといふはまことかたのしまなくに

病めるわがために来るかに鶯は雨戸の外に朝朝を鳴く

何やらむ生くるにあらで生かされているを実感す無碍光かこれ

わが命やがて尽きなむさりながらゆるがせにせじよその消ゆる日まで

念仏詩抄

ナムアミダブツ

(一)

煩惱具足

ナムアミダブツ

煩惱熾盛

ナムアミダブツ

煩惱無尽

ナムアミダブツ

煩惱一定

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

たすけとげんと

(二)

木村無相

ナムアミダブツ

あらわれいでて

ナムアミダブツ

たのませたまいて

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

呼びかけに

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

いつも呼びかけの

中にある

ナムアミダブツの
呼びかけに
ナムアミダブツと
生きるのです
今日一日を
生きるのです

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
わたしの部屋は

——老人ホームにて

わたしの部屋は
//あさがおの間//
あしたに咲いて
ゆうべにしぼむ
今日一日が
わたしのいのち
今日一日が
わたしの人生

今日一日よ念
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ねんぶつのみが
//人生とは
生れ老い病み
死ぬるのです——//

だれかが言った
この言葉
七十の今日
知ったのです

ねんぶつのみが
それを
うるおすのです

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

かくの如きの
//仏かねてしろしめして
煩惱具足の凡夫と
おおせられたる
ことなれば——//

わたしの名前は
//煩惱具足の凡夫//
わたしの中味は
//煩惱具足——//

ナムアミダブツは
かくのごときの
わたしがためなりけり
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナニを信ずる

正 信 偈

正 信 偈とて
いつしかに
念仏わすれ

ナニを信ずる
ご信心
ナムアミダブツと

⑥

聞こえたら
聞こえたままが
ご信心——
信の顔見ぬ
そのままに
安堵（あんど）の
ゆくのが
ご信心——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

——以上武生の太子園にて——

十一月十二日 いよいよ晩秋、当地も北陸らしい曇と雨
のこのごろとなりましたが、スチームを通して下さるの
で暖かいです……一寸したことで腰痛がきてセッセツと
整形外科通いしています。……九月七日入園以来の念仏
詩をひろい出しました。三十六篇ありました、福井に來
てからの念仏詩です。

親鸞聖人の常持語 (一)

花田 正夫

聖人の御持言(ごじごん)は一般に三つあげられています。

一つは『報恩講式文』に「又つねに門徒に語りて曰く、信謗共に因となりて、同じく往生浄土の縁を成ず」と覚如上人が誌していられます。

次に『改邪抄』の第三条に、同じく覚如上人が如信上人から伝持されて「常の御持言には、我は是れ賀古(かこ)の教信沙弥の定(じよう)なり」と伝えて下さっています。

最後に『歎異抄』の末文に「聖人の常の仰せには、弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなきよ」と、唯円房が耳の底に深く刻まれたまを誌して下さいます。

さて、よきにつけ、悪しきにつけ、又聞く人の如何を問わずくりかえしまきかえし同じことを仰言ったことは、只

事でないと思います。聖人御入滅後七百年でありますがどんなにお慕い申してもお声も聞けず、お姿も現れて下さりませぬが、幸に常随昵近された方の心に聞きとられて、書き残された常持語は、聖人の心のおからたであり、いのちそのものの御声であります。借りものの言葉は常持語とはなりません、併し、私の手は何時でも何処でも誰にでもすぐ出して見て貰えます、それは私自身の手でありますから。

聖人のお流れを汲む者として、聖人に直きにお会い出来るところは、聖人の常持語に聴き耳立てる一事にあると愚考いたします。

大谷派の御講師の住田智見師は「聖人の御持言を座右に掲げて念仏の道を辿らせて貰うと、念仏者の生活がおのずからあきらかになる」というようなことを仰言っています。

一、信謗共に因となりて

信ずる者は迎え、謗(そし)る者は退けるのが、相對差

別の世界での鉄則であります。こうした信謗(しんぼう)共に因となって同じく往生浄土の縁を成ずというような境界は、相對虚仮の私共には想像もつかぬ、廣大無辺な世界であります。

聖人御自身は『教行信証』の結文に

「もしこの書を見聞せん者は信順を因となし、疑謗を縁となして、信樂を願力に顕わし、妙果を安養に彰わさん」とお述べになり、更にそのよるところとして『華嚴經』の偈文を引用されて「もし菩薩の種々の行を修行するを見て善不善の心を起すことありとも、菩薩みな撰取せん」と加えられてあります。

これで思い併せませすことは、源信僧都が、大宋の周文徳に『往生要集』を献上された時、その跋文に「たとい誹謗する者あらんも、たとい讃歎する者あらんも、併せて我と共に往生極楽の縁を結ばん」とお書き添えになっています。

このことは、廣大無辺の仏智の絶対境でありまして、そこに開眼せられた方々には、それこそが本当であって、それ以外は皆間違いでであると、時代と民族をこえて皆揆(き)を一つにされる一味の信境であります。

先日、岡山大学の山田宰さんが苦心して訳して下さいましたフランス語歎異抄を読んで驚いた一人のフランス青年が、わざわざ訪ねて来て、

「私は三年前から日本に留学して唐手(からて)を学びに来ましたが、色々修練をしているうちに、日本には勝ち負けを超えた、相對をこえたもの、何とも言いようのない心が流れているのに驚いていました。歎異抄を読むと、そうしたことがいたるところに光を放っているのに心ひかれて、そのことをもっと聞きたいと願っています云々」

とのことであります。この青年の驚異の眼にふれて、私共日本人は、日常茶飯事の中にもそうした相反するものを融化する不思議な大心の流れがあるのに、耳馴れ雀になつて一向に驚けないで、軽く見おとしてることを恥かしく思いました。たとえば菊池寛の『恩讐の彼方』とか、「喧嘩両成敗は武家の法度」といったものから、白隠禪師の「よしあしの葉をひっぴいて夕涼み」又「なきけあるもつらきも遠くなりはてぬ嬉しや他所の山をたすねじ」とか、蓮月尼の「宿かさぬ人のつらさをなきけにておぼる月夜の花の下伏せ」又「月花に浮かれ浮かれて帰るさを寝屋までおくる秋の夜の月」等々もあります。

法然上人は「善悪の凡夫を憐愍す」と仏意を宣揚して下さい、親鸞聖人は「衆水の海に入りて一味なる如し」とか「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」等々と、仏心平等にして更にへだてなき心、あらゆる善悪の衆生を一子の如く憐愍される廣大無辺の仏願力の不思議をくりかえ

しまきかえしお述べ下さっています。

それなのに欧米諸国には「目には目を、齒には齒を」とあるように、相対五分五分であることが当然とされている。因柄に育った青年には、この相対を超え、更にその相対なもの、相反するものを一味に転化する大心に非常な驚異を感じたようでありました。

「貴君は、日本を訪れて、日本に現存する最上、否、無上の宝を見出したことは、金鉢を掘りあてたよりも尊い体験で、どうかそこから無尽の宝を身につけて下さい。英国の史家トインビーは、旧教と新教と相剋してはてしのない英国にあって、真の和平の光は東洋思想にあると着眼し日本に仏教の家庭を訪問してそこを極めようとしていることは誰もよく知るところです云々」と語り合いました。

このフランス青年との談合を機会に、あらためて二千年の永い仏法の流れをたどって、相対差別の冷たい裁きの風の吹きまくる世に、廣大無辺の無碍の仏心の働きを渴仰させられました。

先ず、釈尊御在世の時、戒律のことについて、破戒僧である、否、破戒でない、と善悪是非の論議がおこって教団の者が両派に別れて対立し抗争し、互に自説を固執して、恨み憎み、さげすむという醜い争いが続いた時、釈尊は

夫であったと、自我中心の立場から仏心平等の大悲に帰し給うていたのであります。しかもその凡夫が「人はなはだ悪しき者すくなし、よく教うるをもて従いぬ。それ三宝にたよりまつらば、何をもってか枉（まが）れるを直うせん」と、太子と共に馬子も仏陀の愛し子であったとの御体験からこの憲法は発布せられたのであります。

又、浄土の高祖、法然上人は、幼い時、父君が恨みを受けて殺害せられたのでありますが、その臨末の遺言に、「武士の習いとして父の讐を討てば、相手の子が汝を敵とねらうであろう。この道は永遠の修羅道である。どうか敵も味方も共にたすかる大道を得てくれよ」と云われたことから十五歳で叡山に登り、四十三歳に及んで、十悪愚痴の御自身の救いを選択本願に見出し、やがてその道は、善悪の凡夫を懺悔される、おへだてのない大願海であったと慶喜せられたのであります。

その当時、浄土宗の立教開宗に極力反対された解脫上人も晩年いよいよ死を間近にされて、解脫の道の至難を知られて西方浄土を欣求されたのであります。又明恵、解脫の上奏によって院宣を下して念仏禁止を断行せられた後鳥羽上皇が、後年隠岐の島に流適されて生涯を島守りで終られたのであります。矢張り念仏の行者として往生を願われたのであります。『無上講式』など作られたことは有名でありました。又、

「恨みは恨みによって消えず、恨みは恨みなきによりてのみ消ゆ」

との有名な慈戒をのこされています。これにちなんで、梵達王と長寿王、長生王子の寓話は子供にもよく解るようにならされていきます。

又、仏弟子であった善星比丘が、仏にそむき自ら罪を造って地獄に堕ちて苦しんだ時、仏は地獄の世界の苦しみをよく知られながらその地獄にまで現れたもうて、善星比丘を救いあげられたのであります。更に仏陀の従弟であり仏弟子であった提婆が仏にそむき、仏心から血を流すまでになりましたが、仏はその提婆にも救いの御手をさしのべ、やがて成仏すべしと仰言っています。

日本では千三百年の昔出生せられ、和国の教主とも救世観音菩薩とも尊崇せられた聖徳太子は、叔父君の崇俊天皇を殺害した横暴極まりのない蘇我馬子と、内外多事多難の日本国を荷負されるに及び、幸に慧慈、慧僧の高徳の僧を迎え仏道に専念されて三十歳頃にその玄意を得られたのであります。そこに国是を十七憲法に定め、その第十条に、「……我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ、是非の理なんぞよく定むべけんや云々」と示されています。ここで、は我よし馬子悪しと憎み、さげすんだ心が仏心に融化させられて、そういう自分も亦凡

天台の学匠であって大原問答の時は法然上人を糾弾（きゅうだん）するために出席せられた念仏房は、深く感ずるところがあつて念仏の人となられています。高野の明遍僧都も『選択集』を批判しようとして、法然上人の悲心にふれ念仏行者となられました。更にいちじるしい出来事は、白河の御坊で法然上人が説法されている時、盗人としてのびこんだ耳四郎が、悪人愚人のこらず救済せられるとの教えに驚いて生涯念仏の道を一筋にたどっている事実であります。

親鸞聖人をあやめようとして板敷山の辨円は、聖人を庵におそい、かえって害心たちどころにひるがえって篤信者となり、或は山の雪路で行きなすまれた聖人を邪見にあつかった日野左衛門も亦念仏の徳に驚き、廻心懺悔して念仏者の群に投じたと伝えられます。

聖人はこうした数々の実例に接し、そこに相対差別の対立抗争を超えて、その全体をよく理解して、大悲の胸におさめて下さる仏の真心を渴仰せられて「謗法を縁とし、信順を因となして、信樂を願力に顕わし、妙果を安養に彰わさん」と常に仰せられたのであります。

しかしここでよく注意せねばなりませんことは、こうした妙用は仏の願力の自然の顕現でありまして、高祖や祖師

は、御自身にその広大な慈光をうけられて、相對五分五分の行きつまりをこえて行かれたのであります。これを譬えますと、明月が夜空に輝きますが、月自身には光も熱もありません、冷たい黒い塊りでありますが、明月と輝くのは太陽の光を全体にうけて、我等に照り返すからであります。

聖人の愚禿悲歎懷和讃に、

悪性さらにやめがたし ころろは蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆえに 虚仮の行とぞなづけたる

無慚無愧のこの身にて まことの心はなけれど

弥陀の廻向の御名なれば功德は十方にみちたまう

と、われにしてわれならぬ妙法をほれほれと随喜讃仰していられます。

大戦に軍医として出陣し、遂に戦死した信友林田さんは少年の頃、生母が離縁となり、次の母を迎えましたがそこへだての壁が出来、母を憎み、父を恨むという暗黒におちました。そこで何とかして自分の心を和げようと音楽をやり、運動をしたのでありますが、それもどうにもならず、京大の医学部に入ってからキリスト教に救いを求め「敵を愛せよ」の誠めに行き詰ったのであります。その時、同窓の川畑さんに勧められて知四明寮に入り、そこで『歎異抄』で、限らない大悲心にふれ、その喜びの中から

ともしび

聚 墨 生

さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべしとこそ聖人は仰せそうらいき。

(歎異抄十三)

私はこの一句を永い年月くりかえして誦してきたが、うぬぼれの強い身として、人とは違つてすこしは取り柄があるという心があつて、素直にこの仰せがうなづかれなかつた。しかし、日常の生活で、腹を立てまいと願う下から腹を立て、愚痴を云うまいと思ひながらまたしても愚痴をこぼす身、煩惱無尽の身として、それに相応した縁にふれると、どんな振舞をするかわからない身と知られて、聖人の仰せがそのままうなづけはじめた。すると地上の一切の人々の織りなすあらゆることが、残らず私の内心の絵巻物と受け取れ、他の中に自己を見出せるようになった。

ここに私の業報の一切を見抜いて下さる阿弥陀仏は、海綿が水を含むようにその隅々まで大悲心が輝いていることを仰ぎ、私が救われることは同時に一切人も必ず救われる、もし一人でも仏の救いからもれる人があれば私自身がまた救われないという廣大無辺な仏徳を知らされてきた。

(四十八年八月二十六日)

我は黑白をも知らぬ童子の如く、是非も知らぬ無智の者

「今まで生母を犬畜生におとるひどい親と恨んでいましたが、畜生でさえ身をすてて子を護るのに、西東もわからぬ子を残して去らねばならなかつた母は、どんな業を持つてか知る由もありませんけれど、千本の槍でつかれるよりも苦しかつたことと、お念仏の中から思いつかせて貰いますと、この言語に絶する苦惱を持った母を責め讀けたことはなんといいひどい鬼子であつたかと反省させられ、母に会つておわびせずには居られなくなりました云々」

と語つてくれましたことを思い出します。うつし世に親となり子と生れながらも、恨み合い責め合はずにはいられぬ業苦はてしない身を、それをやめてこいでもなく、そのままでもよいでもなく、さぞ切ないであろう、苦しかりうとその業苦とはなれず、呆れたまうことのない大悲心一つにおさめられて、今まで光の影さえも射さなかつた暗い心底に、仏の眞実心がとどくと、ここにあかるい世界がひらけ、今までにくみろうた人の身になるゆとりが出来、ひがみまがる心もおのずからやわらぐのであります。

人と人との関係は愛憎つねなく、利害得失によつて集散離合の鉄則から出られないが、ここに仏心のおまことがあらわれて下さつて、今生だけのちぎりでなく、来生さとのまへのえにしも結ばれ、俱会一処のたのしみも仏力に支えられて味わうことが出来るのであります。

なり。

(法然上人全集)

はじめて上人のこの文を読んだ時、あまりに誇張されていると思つたが、七十になつた今日、老いて老いの自覚も出来ないことや種々のことによつて段々その通りであるとなづけ始めた。私共が万事につけてもし黒を黒、白を白と正しく知る力があれば、人にだまされたり、やりそこなうこともなく多々益々弁ずることも出来よう。古來の高僧達は心血を注いで生活を正しくし、心をしずかにし、澄みきつた智慧を専心求められたのである。

然し凡愚の私共は、身びいきな心に防げられて、共に不完全な人間同志なのに、我よし彼わろしと思ひ、何時か何処かに幸せがあるだろうとの幻影に惑わされ、次々と幻滅の苦におちては愚痴をこぼす。こうした泥沼から足を洗えぬ身としらされるにつけ、上人の「釈迦弥陀二尊の仰せをうけ念仏に帰れ」とのお勧めに唯一の灯火を与えられる。

(四十八年十一月十八日)

あとがき

謹んで新春をおよろこび申上げます。私も一月一日に満七十を迎えました。賀状のはしに

御名ひとつきほぎごとせん 古稀の春と駄句を書き添えました。孔子聖人は「己が欲するところを行いて規(のり)をこえず」と古稀に到達して、人と道とが一つにとろけた円熟さを讀えておりますが、私には及びもつかぬことで、当市出身の住田智見師が

老いぬれど娑婆執着の凡愚かな
とお亡くなりになった七十一歳に誌されています通り、臨終の一念にいたるまでたえずきえぬやりそこないの身であります。喜びも悲しみも夢のように過ぎ去った今日、我武者羅に走って身近かにあつて私を護念して下さった方々の心も汲まず、踏んだり蹴ったり、しかもその多くの方々はすでに幽冥境を異にして、おわびする術もなく、惨怛とした罪業の跡、とりかえしもありませんぬ身でありますが、
惨怛たる悔みのこせし一一の
あとかたもなき無碍の一道
とかつて池山先生が示された、本願念仏の無碍光をいのちとして余生をたどらせて頂くばかりであります。

敗戦以来、経済の成長を錦の御旗として

ともかくも順調に生産はあがり、世界の市場に企業は進出しましたが、資源を海外に依存する国の弱さが、アラブの石油問題を機としていたるところに支障を生じ旧年末以来、日本丸の行方は波浪ざかまく航路となりまし。

こうした時こそ一人一人の人生航路の方向の確立が何よりも重大事となりました。そして最悪の場合を覚悟してそれを乗り越えねばなりません。昔読んだインソップ物語に、父の病によって少年が隊商に加わり、ラクダの旅を続けた時、暴風に足跡も消えた砂漠で生き死にの苦にあつた時、母から教えられた北斗星の光りを頼って無事に難をまぬかれた説話が思い出されます。天地が崩れても不動不変の光りをしつかりと身にうけて、念仏成仏の道を進ませて頂きましょう。

近角先生は「お慈悲一つで人生手放し」と仰言つたと福島先生からお聞きしております。生も死も御仏におまかせして、今日一日今日一日を大切に大地をしつかり踏んでたどらせて頂きましょう。

私共凡愚は、順調にあうと「あがりあがつて落ち場を知らぬ」迷いに入りこみ易いので、むしろ逆縁によつて聖人のみころをいよいよよ身にうけさせられるものであります。

「宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花の下伏せ」との蓮月尼の心もこれ

に近いようであります。

御案内

○毎月第一、二、三日曜午後一時半、一道会例会。

市電、新郊通り一丁目下車東へ三筋目、左入ル二軒目

○毎月二十四日、午前午後、教西寺法話会。

市電、御器所通り下車、市バス、北山下車。

定価 半年 四〇〇円(送共)
一年 八〇〇円(送共)

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駈上町二ノ八八
電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字稲谷
印刷人 吉野穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七